



赤変後に黒変する



古くなったもの

詳細に比較するための検討まではできていない。

このベニタケはいろんなところでいろんな名前と呼ばれているが、私は仮称として「ミツイロベニタケ」と呼んでいる。アイタケ (*R. virescens*) に似ているが、カサが赤もしくは緑と赤を交えるフタイロベニタケ

(*R. viridi-rubrolimbata*) というものがあるように、カサが赤紫、草色、黄色の三色を基本色とすることから「ミツイロベニタケ」というのがよいのではないかと思っている。最近の新しい和名にはやたらと長く、説明くさいものが多いと感じている。「既知種+特徴」というパターンや形容詞がふたつ付く和名ではなく、できるだけシンプルにきのこの特徴を表す和名がいいと思っている。

将来の目標として、これを新種記載できればと思っているが、これがなかなかハードルが高い(フウセンタケ属よりはましかもしれないが)。しかし、それを自分の究極の目標としてこれからも観察を続けたい。

2018年のスライド会で「ティラミステングタケ」を日本新産種で、このベニタケを新種記載することを目標にしたいと言うと、浅井淑子さんに「よく言った。がんばれ!」と励ましていただいた。しかし、そのときはそれが最後にお話する機会になるとは思いも寄らなかった。5月に長野県で開催された日本菌学会大会で突然の訃報を耳にしたときは信じられなかった。背中を押してくださったことに感謝するとともに、目標に向かって努力することがその激励に応えることになると思っている。



房総きのこ今昔 ー東葛地域の初茸狩ー

昭和10年ごろの総武鉄道(のちに東武野田線)のパンフレットの年間案内には、'初茸狩の好適地'として流山市の「初石」、柏市の「高柳」、野田市の「川間」附近があげられている(写真、部分拡大)。ハツタケはマツの存在を示し、案内に掲載されるということは、多くの人々が集えるほどたくさん採れたということでもある。現在は住宅地や畑地が広がるこのあたりは、かつて小金牧といわれた馬の放牧地で、江戸時代には多くのマツが植林されたそう。林は定期的に管理され、切り出された材は、おもに薪炭とされ江戸へ運ばれた。牧は明治時代に開墾され、集落がつくられるもまだ広大な土地が残され、江戸時代同様に飼いや葉をとる目的での利用もなされていたそう。ハツタケは10~20年くらいの若いマツによく発生する。東京より電車で日帰りできる東葛地域の初茸狩は、江戸時代から続く、実益とレジャーを兼ねた季節の大イベントでもあったことだろう。(吹春公子)

十 月
初茸狩、初石、高柳、川間驛 附近好適地、清水公園釣堀